

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 9 月 8 日現在

機関番号：32606

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26770247

研究課題名(和文)朝鮮清間貿易の管理制度の運用

研究課題名(英文)Choson dynasty's trading policy towards Early Qing

研究代表者

辻 大和(TSUJI, YAMATO)

学習院大学・付置研究所・助教

研究者番号：50632303

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：朝鮮が清に行った国際貿易の管理政策を明らかにすることを目的とし、中朝貿易関係の公刊資料、台北・ソウル・北京等所蔵の未公開資料の調査を行った。その結果、朝鮮の対清貿易政策が対明貿易政策から何を継承し、継承していないかという点(従来の研究では明代と清代に分断して研究を行う傾向があった)を明確にすることができた。1637年の丙子の乱後に、朝鮮は対清貿易において対明貿易政策のほとんどを継承したものの、明代にはそれほど行われなかった開市(互市)が広がった過程を明らかにした。さらに1644年の清入関後には清朝が、明朝と違って朝鮮使節がもたらす薬用人参に抑制的で、朝鮮もそれに対応したことを示した。

研究成果の概要(英文)：This study had aimed to clarify the management policy of international trading that took place between Choson and Early Qing. I investigated both published and unpublished materials in the document collections in Taipei, Seoul, Beijing, etc. As a result, Trading policy of Choson towards Early Qing inherited some points from It's policy towards Ming( previous studies tended to carry out the research dividing Ming Dynasty and Qing Dynasty ). After 1637, trading market spread near the border, which has not been so much done in the Ming Dynasty. In addition, after Qing Dynasty's entering Beijing in 1644, Qing began to suppress Choson's merchant activity on ginseng.

研究分野：朝鮮時代史

キーワード：朝鮮 明清 貿易 東洋史 使節 互市 開市 朝貢

## 1. 研究開始当初の背景

17～19世紀にかけて朝鮮王朝の外交面については研究が進んでいるが、朝鮮政府の通商については不明な点が多い。これまで明清交代期朝鮮の対明貿易政策について研究を行なった結果、明滅亡前後の朝鮮の対中貿易政策に関する研究が必要であることを痛感した。貿易に関しては、この時期に朝鮮は日本に薬用人蔘を輸出し、日本から銀を輸入し、さらにその銀を中国に輸出するという活動を活発化させていた。つまり朝鮮は東アジアのなかで銀の中継機能を担っていた。朝鮮の貿易に係りしてどのような制度作られ、運用されていたのかということについて、1644年の明滅亡前後について検討が必要と考えた。

## 2. 研究の目的

朝鮮と清間で行われた、国際貿易を管理する制度の運用を明らかにすることが研究の目的であった。この時期には朝鮮ルートの東アジア貿易の最盛期であったにも関わらず、朝貢使節や開市場の貿易を朝鮮政府がどのように管理していたのか具体的な状況が不明なままである。そこで本研究においては公刊資料のほかに、中央研究院歴史語言研究所や中国第一歴史檔案館、カリフォルニア大学バークレー校等所蔵の未公刊史料の収集を行って朝鮮・清間の貿易管理制度の運用の具体的な状況を明らかにすることとした。

## 3. 研究の方法

### (1) 公刊史料中の中朝貿易関係史料調査

朝鮮と清の官撰・年代記資料について収集・分析を行う。朝鮮側は『朝鮮王朝実録』、『承政院日記』、『備辺司臚録』の年代記資料のほか『同文彙考』と『通文館志』のなかから貿易関係記事を探集する。清側は『清実録』および『大清会典』のなかから貿易関係記事を探集する。特に外交使節の往来を支える制度に関する記事に集中する。この作業を通じておおまかな制度の沿革を把握する。

### (2) 台北・北京・ソウル・バークレーでの未公刊の中朝貿易関係史料調査

調査地は、清朝のアーカイブスである内閣大庫の档案を大量に所蔵する中央研究院歴史語言研究所(台北)、中国第一歴史檔案館(北京)、同じく清朝の宮中の档案を所蔵する故宮博物院図書文献館(台北)を予定した。内閣大庫档案では朝鮮使節に関する記録を重視する。『同文彙考』には完全に外交文書が収録されている訳ではなく、誤字脱字が存在するからである。さらにカリフォルニア大学バークレー校において浅見文庫の調査を行う予定であった。

### (3) 国内での追加調査

朝鮮学関係の学会で発表を行うほか、日本国内での資料調査を行う。

## (4) 学会発表・論文

韓国朝鮮関係の学会で口頭発表を行って新しい知見を広く報告するとともに、分野の近い専門家からのフィードバックを得る。そしてその結果を論文として学術誌に投稿する。

## 4. 研究成果

### (1) 成果の概要

公刊資料中の中朝貿易関係資料、台北・ソウル・北京等の資料所蔵機関において未公刊資料の調査を行った。その結果、朝鮮の対清貿易政策が対明貿易政策から何を継承し、継承していないかという点(従来の研究では明代と清代に分断して研究を行う傾向があったため、清代の朝鮮の対中貿易政策の独自性が分かりにくかった)を明確にすることができた。とりわけ1637年の丙子の乱後に、朝鮮は対清貿易において対明貿易政策の多くを継承したものの、明代にはそれほど行われなかった開市が広がっていったことを論証した。さらに1644年の清入関後には清朝が、明朝と違って朝鮮使節の商業活動に抑制的な態度をとっていたことを示した。

### (2) 公刊資料中の中朝貿易関係資料調査

朝鮮と清の公刊史料について収集と分析を行い、朝鮮側は『朝鮮王朝実録』、『承政院日記』、『備辺司臚録』、『通文館志』などを調査したほか、『瀋陽日記』影印版を購入して調査を進めた。清側は『清実録』および『大清会典』のなかから貿易関係記事を探集した。また文集類についての調査も進めた。これらの調査を通じて、以前より調査していたデータを修正することができ、『東洋学報』および『朝鮮史研究論文集』において朝明間における貿易制度・政策に関する論文を発表し、清代の朝清間貿易を考える基盤作りを行うことができた。

### (3) 台北・ソウル・北京における資料調査

2014年5月に台北に出張して未公刊の中朝貿易関係資料調査を行なった。故宮博物院図書文献館における『上諭档』などのデータベース調査および『清太宗実録』の原本調査、書店での公刊資料の収集を行なった。(1)の調査の結果と合わせ、『アジア遊学』に後金と朝鮮との貿易関係に関する論文を掲載することができた。さらに2015年3月にはソウル大学校奎章閣を訪問して文集類の資料調査を行なった。

2015年度には夏休み中に北京の中国第一歴史檔案館において、内閣大庫档案資料中の、1640年代の朝鮮/清関係の題本の調査を行うことができた。その結果、朝鮮使節の薬用人蔘携帯に対する清の規制、同使節が朝貢品輸送中に起こした事故などの新情報を持つ題本を見つけることができた。そのうち薬用人蔘携帯に関しては後述の朝鮮学会大会の

発表に盛り込むことができた。

計画当初はカリフォルニア大学バークレー校において浅見文庫の調査を行う予定であったが、必要であった『備辺司関録』等、資料の多くがデジタル化され、高麗大学校民族文化研究院の web サイトで公開されたため出張を見送り、日本国内で web からの閲覧と関係資料調査につとめた。

#### (4)国内での追加調査

2014年9月には関西大学図書館内藤文庫蔵の朝鮮北部における朝鮮・清関係の文献調査を行ない、咸鏡道北部における朝鮮の開市関係の情報を収集することができた。

2015年3月には京都大学附属図書館河合文庫収蔵の文集類に関する資料調査を行うことができた。

#### (5)学会発表・論文

2014年10月に開かれた 韓国朝鮮文化研究会大会で「17世紀中葉朝鮮王朝による対清貿易の開始について」という口頭発表を行い、その報告内容を修正して『内陸アジア史研究』に論文を投稿し、査読の結果掲載された。『内陸アジア史研究』50号論文「丙子の乱後朝鮮の対清貿易について」では、1637年に朝鮮の対明貿易政策を継承して、対清貿易政策の基礎が築かれたものの、明代にはそれほど行われなかった貿易活動が広がったことを論証した。

例えば 1637 年以降、朝清間では朝貢と開市以外の臨時の貿易の機会が増加した。朝鮮の世子が滞在した瀋陽館は朝鮮から清への物資輸出の窓口となるが多かった。朝鮮は清に果物などの生鮮品や紙の工芸品を臨時に輸出することがあり、品目や数量が固定された歳幣や方物を補完するものであったと考えられる。こうした臨時の需要に対して朝鮮政府は 1636 年以前と異なり、地方まで物資の求索を行い、必死に調達を図った。また物膳の輸送におけるタバコ携行のように朝鮮政府が細部まで把握していない事例も見られた。一方で朝鮮は清からの一方向的な要求をただ受けていたわけではなかった。朝鮮は取引機会の増加を活かし農牛や棉種といった農業生産のための財を清に求め調達することにも成功した。

しかし取引機会が増加したことで朝鮮の官吏による密輸の問題が発生した。朝鮮政府は官吏によるタバコ、青布などの清への携行を禁止したり、物膳輸送の駄数を制限したりするなど、清から密輸の疑念をもたれないように図った。東萊の倭館に明産品が入らなくなるなど、明との貿易は相当程度遮断されていたと推測される。

このようにして見ると、1637 年から 1644 年の間は、従来の方物に加え、歳幣や臨時の物品要求のように、清が財政上必要なものが朝鮮の義務に追加され、朝鮮も国内から必死にその調達を図ったことが大きな特徴であ

る。

2016 年 10 月に天理大学で開催された朝鮮学会大会においては、「17 世紀朝鮮の対清貿易制度の改変について」という題目のもと、清の入関後にどのように朝鮮 / 清の貿易制度が変化したのかという発表を行った。とりわけ清朝が、明朝と違って朝鮮使節がもたらす薬用人蔘に抑制的な態度をとっており、朝鮮もそれに対応したことを示した。例えば入関(1644年)前後の中朝貿易では燕行使の定期派遣回数が明代の3回から1回に減り、それまでと違って中江開市に監督官を送るようになった。また燕行使の荷物検査をめぐる変化があり、朝鮮側では義州での荷物点検が厳格化し、清では出入国時に検査が行われるようになった。

#### (6)今後の課題

1650 年代以降に朝鮮の対清貿易政策がどのように変容し、19 世紀に至るかという点には十分に研究を深めることができなかった。今後の課題としたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

辻大和「17世紀初頭朝鮮の対明貿易 初期中江開市の存廃を中心に」『東洋学報』96(1)、1-30頁、2014年6月。

辻大和「一七世紀 朝鮮・明間における海路使行と貿易の展開」『朝鮮史研究会論文集』52、127-153頁、2014年10月。

辻大和「朝鮮の対後金貿易政策」『アジア遊学』179、67-82頁、2015年2月。

辻大和「丙子の乱後朝鮮の対清貿易について」『内陸アジア史研究』30、1-21頁、2015年3月。

〔学会発表〕(計3件)

辻大和「17世紀中葉朝鮮王朝による対清貿易の開始について」第15回韓国朝鮮文化研究会大会、2014年10月25日(於東洋大学)。

辻大和「17世紀朝鮮の対清貿易制度の改変について」第66回朝鮮学会大会、2015年10月4日(於天理大学)。

辻大和「17世紀朝鮮と明との海上交流」2015 東亜細亜海港都市国際学術会議、2015年11月26日(於済州大学校。済州大学校耽羅文化研究院、仁荷大学校韓国学研究所、釜山大学校韓国民族文化研究所、韓国海洋大学校国際海洋問題研究所、木浦大学校島嶼文化研究所共催)。

〔その他〕

ホームページ等

<http://researchmap.jp/yamtsuji/>

6．研究組織

(1)研究代表者

辻 大和 (TSUJI, Yamato)

学習院大学東洋文化研究所 助教

研究者番号：50632303